

新 今昔物語

第7話

市の指定文化財⑦ 戸口装置

JR四条駅西側に大阪府営北新町住宅がありますが、この辺りは縄文時代から近世までの複合遺跡である北新町遺跡で、昭和62年（1987）、住宅建て替え工事に伴う発掘調査により出土しました。

古墳時代中期前半と考えられる井戸の井筒に転用されていたもので、取り上げた結果、戸口（建物の出入り口）のほとんどを構成するもので、マツ科の常緑針葉樹であるモミ材が使用され、表面には手斧で削られた痕跡が明瞭に残されていました。

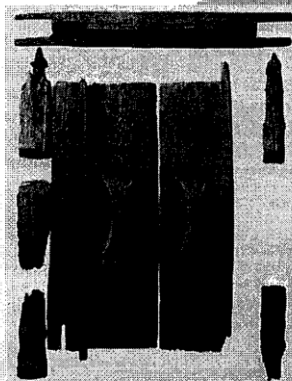
写真①の中央の長さ約1.4m、幅約0.4m、厚さ約4cmの「扉板」が2点、上部の「楣」（出入り口の扉の上に渡した横木）が1点、「小臨板」（扉板の両側に据え付ける薄い板材）が1点、そして「方立」（扉の両側に付けた厚い縦板）と考えられる部材の5点が確認され、「蹴放」（出入り口の扉の下にある、内外のしきり

をなす溝のない敷居）だけが欠けている状況でした。

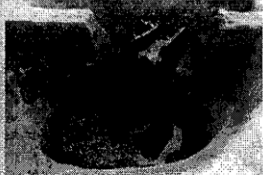
弥生時代から古墳時代にかけての戸口の部材は全国で78程度の出土例が確認されていますが、それらは各部材が単独で出土するものであって、このようにほぼ部材のそろった状態で出土したものは全国でも唯一のものと思われま

す。当時の建築物の戸口を復元する上で大変貴重な実物資料といえます。

（生涯学習課）



①戸口装置（歴史民俗資料館展示）



②戸口部材を井筒にした井戸

新 今昔物語

第8話

市の指定文化財⑧ 諸福天満宮本殿

諸福を東西に横切る古堤街道を北に入ったところに、諸福天満宮があります。

諸福天満宮は、権現造風の拝殿に覆われた中に本殿が納められています。本殿は、一間社流造で、屋根は檜皮葺とされています。

各部に施された墓股には、虎や猫などの動物が写実的に彫刻されており、また向拝の木鼻を象の彫刻とするなど、江戸時代初期の桃山様式建築の特徴を表します。

社伝によると、寛永20年（1644年）に当地に勧請されたというのですが、建築様式などから考えても、この本殿がこのときに建てられたものとして間違いないと思われる、市内では最も古い建築物といえます。

平成の修復がなされて彩色が施されたため、往時の姿が復元されました。

なお、隣接する勝福寺は諸福天満宮の宮寺的性格にあつたものと考えられます。

諸福天満宮は、江戸時代には「産土神社」と呼ばれていました。菅原道真を祀っていることから、明治5年（1872年）に「菅原神社」と改称されましたが、平成11年現在の社名に改められました。（市史編纂委員 岡村喜史）



木鼻

